

たとえば闇を求めて泳ぐような

樋本一穂

三人姉弟の長女だった。

小さな頃、父と母の膝はいつも、二つ下と三つ下のふたりの弟たちに占拠されていた。壊れそうなほどに儂い姿形の弟たちはもちろん、父と母も、それを当然のこととして考えているようだったし、三歳の私自身がそのような言葉で思考したわけではないが、「これが長女の宿命だ」と半ば諦めのような気持ちでいた。

それでも、保育園や近所の友達との邪気のない意地悪にあったりした夜は、やはり父や母の膝を恋しく思った。けれど私は、指をしゃぶり父のあぐらにすっぽりと収まる二つ下の弟や、母に抱かれ乳を吸う三つ下の弟をのかせる言葉を知らなかった。代わりに、私は居間の押入れに籠った。そして数センチだけ開けた襖の隙間から、父と母の膝に乗る弟たちを眺めた。あちらの世界は、蛍光灯の灯りやブラウン管のテレビが放つ光に照らされて、まばゆかった。そのまばゆさは、決まって私を心細くした。

夜、居間に敷き詰めた布団の向こうで雑魚寝する弟たちを寝かしつけた父が、私の隣へやってきて添い寝をし、「グンナイ、グンナイベイビー、涙こらえて 今夜はこのまま、おやすみ、グンナイ」と歌うのを、私はタオルケットの端っこをしゃぶりながらじっと聞いた。低くて渋い声なのにひどく音痴な父の歌声を聞きながら、私は、照明を落とした部屋の闇のなかで眠りに落ちていった。

*

二〇〇一年。

N市。

メゾン・ド・エス。

私が二度目の予備校生活を送った年であり、その年に過ごした都市であり、その時に暮らしていたアパートの名前だ。

一九歳のときに一浪して中国地方の大学へ進学したものの環境が合わず、ほとんど引きこもりのようになり、三年で退学して実家へ戻った。しかし、その時期、ちょうど母が精神の安定を崩していた。母にとって私は悪い刺激にしかならないと判断した父に勧められ、私は実家の隣町で一人暮らしをすることとなった。「第二こつぶき荘」という名の古いアパートで、アル

バイトをしながら、将来がまったく見えない日々を二年ほど過ごしていた。三年目を迎えようとしていた初春のある日、医者である父がふらりとアパートを訪ねてきて、「大学はひとつくらい出ておいた方がいいぞ。なにかを成し遂げたという経験は大事だからな。援助はする」と言った。父がこの言葉を伝えるまでの二年間を、ほんのすこし考えた。私は、受験を決意した。どうしてそんな決断をしたのか、今となっては思い出せないが、「だったら、医学部を受験する」と父に伝えた。父は「そうか。わかった」と言ったただだったが、瞳の奥がかすかに揺れていた。

私は第二ことぶき荘を引き払い、予備校のあるN市のアパートへ引っ越した。メゾン・ド・エスだ。

ド・S。

私のアパートは、ふざけ半分でそう呼ばれることがあった。

「ねえ、エッチ？ ド・Sに寄っててもいいかな？」

「ド・Sに住んでるエッチって実はド・Mだったりして」

たとえばこんなふうには。

メゾン・ド・エスをそう呼んだのは、ヤッチとヨッチというふたりの男たちだった。背は低くてくつきりとした目鼻立ちのヤッチと、背は高くて中性的な雰囲気のヨッチ。このふたりの男たちは、私をエッチと呼んだ。私の名が「悦子」だからというのがその理由だった。その流れから、靖司のことはヤッチ、義孝のことはヨッチと呼ぶようになった。

いや、逆だったかもしれない。同じ高校の男子テニス部の先輩と後輩の関係だった靖司と義孝はもともとヤッチとヨッチと呼び合っていて、その流れに私が乗っかりエッチとなったのだったか。その辺の記憶は曖昧だ。ともあれ、私たちは互いをヤッチ、ヨッチ、エッチと呼びあった。

私たちは予備校のクラスメイトだった。

医学部受験を目指した三浪以上の浪人生、あるいは大学を卒業していったん社会に出たものの医師を目指すことにした人のために、その年の春、予備校が実験的に作ったクラスだった。便宜上、「3D（サンデー）」と名付けられたそのクラスは、ぜんぶで六人の小さなクラスだった。講義形式の授業ではあったが、人数の少なさから講師と生徒との距離が近く、ほとんど個別指導を受けているように感じた。講師陣もその予備校のトップクラスの先生をあてがわれ、医学部を目指し勉強するには申し分のない環境だった。

三浪以上もしくは大学卒業生、という入塾条件の性質上、3Dは、出来の良くない生徒（三浪以上）と、志の高い生徒（社会経験を経てる人）とに二分された。ヤッチとヨッチと私が前者で、残りの三人が後者だった。正確に言えば、一浪しかしたことのない私は後者に属するの

だが、ヤッチとヨッチは、それから予備校の関係者たちも、私の空白の二年間を浪人期間とみなしたのだった。私たちを除く三人は、おそらく二十代後半から三十代前半くらいのも、一見すると(、、、、)真面目そうな男たちで、模試の成績も良かった。それから、これは感じ方の問題かもしれないが、彼らは私たちを見下しているようだった。三人は休み時間になると廊下のベンチに集結し、コーヒーを飲みながら私たちの知らない用語で会話をしていた。私とヤッチとヨッチは、煙草を吸いに外へ出る以外は朝から夜まで予備校に籠った。むしろ真面目そうな三人組の方が、昼ご飯を食べに行ったり、授業後に喫茶店へ行ったりと、街へ繰り出しているようだった。

私たちが卒業(というのだろうか)したあと、3Dは消滅した。その後、3Dのような試みがなされたという事は聞かない。

二十三歳のヤッチと二十二歳のヨッチと二十五歳の私は、父親が医者であること、口にこそ出さなかったがそれぞれが自分のことを「出来損ない」と思っていて、ある種の劣等感を抱いていたこと、そして年齢が近かったこともあり、出会って間もなく、多くの時間を共に過ごすようになった。ほどなく、私たちは性別こそ違いが似たタイプの人間であり、波長のようなものも合うことがわかった。三人とも煙草を吸い、酒を飲んだ。音楽が好きで、それぞれ楽器を奏でた。ヤッチはギターを、ヨッチはブルースハープを、私はピアノを演れた。ヤッチとヨッチが楽器と酒を持ち寄り、鍵盤キーボードを置いてあるメゾン・ド・エスの私の部屋で、ときどきセッションをすることもあった。腕はそれほどはなかったが、三人の奏でる楽器の音は心地よく共鳴した。共鳴する音のように、私たちの関係も響きあっていた。そんなような気がしている。

当時、私はヤッチとヨッチとの友好を深めながら、一方で高校時代の国語の教師Kと不倫をしていた。Kとの関係は長く、その年の四月で七年目を迎えた。

関係は、高校の卒業式の夜に始まった。その夜、有志が集まり卒業パーティーのようなものが催された。生徒の親が経営する飲食店(というかスナックだ)を貸し切り、そのパーティーは行われた。有志とはつまり、高校の派手な男子や女子、そしてノリの良い教師たちだったのだが、決して派手ではない私とその場にいたのは、私の友達が派手で半ば強引に連れて行かれたからだった。

「ほら、思い出作っとうようよ」

友達と開始時間の少し前に店に入ると、燕脂色のベルベットのソファが部屋を囲むように置かれていて、ガラス製のローテーブルにはビールやウイスキーや氷などの酒類とオードブルが所狭しと並べられていた。ミラーボールの下にカラオケのモニターとマイクがあった。すでに十人ほどがソファに座り談笑していて、身体を寄せ合っている恋人らしき男女もいた。

友達と入り口に近い一番端の席に座ったが、パーティが始まるとみなが酒を持って好き好きに移動を始め、席など関係なくなった。友達も、「ちよつとあつちに顔だしてくるね」と席を立ち、私はひとり取り残される形になった。酒など飲んだことがなかったが、ソフトドリンクは用意されておらず、ノンアルコール飲料は水割り用に置かれた水しかなかった。しばらく水を飲んでいたがあまりに孤独で、それを紛らわすために酒を飲んだ。空腹だったせいだろう、酒はすぐに身体を回り、頭がぐらぐらと揺れ吐き気を催した。トイレへ行こうと席を立つと地面が揺れているようでまともに歩けず、ああこれは困ったことになったなあ、と思っていたところに現れたのがKだった。

Kは私をトイレへ連れて行き、介抱してくれた。気持ちが悪いと言ったら、長い指を私の喉に突っ込み吐かせてくれた。Kの授業を受けたことはなく、ただ、Kは端正な顔立ちだったから女子生徒に人気があることは知っていた。Kがお湯を持ってきてくれて、それを飲むと頭のぐらぐらがだいぶやわらいだ。

「すみません」

Kに謝ると、

「お前、バカだなあ。こういうときは、ありがとうでいいんだよ」
頭をくしゃりと撫でられた。

「お前、彼氏いるのか？」

「まさか！ 今まで彼氏なんてできたことないですよ」

「じゃあ、僕と付き合おう」

「え？ からかってます？」

「いや。本気だよ」

自分が夢でも見てるのか、あるいは酔いの延長にいいのかと思ったが、唇に触れたKの柔らかな唇の温かさに、現実であると知った。Kは既婚者なのだから、卒業したとはいえ、こんなふうに元生徒に声をかけるその人間性には問題がある、と今なら気付くが、私はすっかり舞い上がっていた。Kとの関係が始まりを告げた夜だった。

中国地方の大学へ通っている三年間は遠距離恋愛で長期休みにしか会えなかったが、その期間を除くほとんどの年月を、私はKと過ごした。Kは、私が大学を中退して戻ってきたことを喜んでくれたし一人暮らしも歓迎したが、一番喜んだのは、私が医学部を目指すと言ったときだった。

「女医と付き合えるなんて、そうそうないよな」

Kとの関係がこの先もずっと続くことをほのめかされたようで、純粹に嬉しかった。私たちの関係に変化が訪れたのは、3Dに入って間もない頃のことだった。

桜の花が舞い落ち、深い緑へと変わりつつある暖かな夜だった。その日は、映画館で『ハン

ニバル』のレイトショーを観た。映画館からメゾン・ド・エスへ向かう道すがら、私とKはいつものように手をつないで歩いた。Kは饒舌で、それは映画を気に入った証拠なのだが、「ジュリアン・ムーアもいいけど、やっぱりジョディ・フォスターには敵わない」など、映画の本質と離れた話ばかりした。Kの女の趣味は一風変わっていた。Kは、一般的に「美人」と言われたり「可愛いね」と褒めそやされる女、つまり男ウケするような女にはまったく惹かれなかった。Kは知的な顔の女を好んだ。実際には知的でなくても、知的な雰囲気をつけた女が好きだった。Kは私の顔が「知的に見えるから」という理由で付き合いたいと思ったのだと、いつか言った。私は、ちっとも女らしさのない、堅物のような自分の顔が嫌いだったから、Kからそんなことを言われても簡単には信じられずにいた。私がKと会えるのは決まって平日の夜で、それはやはり、好みの顔とはいえ私の外見が地味だから暗がりを選んでいるのだろうと思っていた。女らしい顔に生まれていたらKとの関係ももっと違ったものになっていただろう、と。Kはジョディ・フォスターを褒め、私は静かに落ち込みながら、メゾン・ド・エスへ続く川辺の道を歩いていた。

「くそがしたくなつた」

Kが言った。

「糞がしたくなつた」と聞こえたものの、Kは「くそ」についてなんの前触れも見せなかったし、前触れがあったとしても、それは私にとって反応に困る発言だった。もし、聞き間違えたのなら、と思うと、「……ごめんさい。……よく聞こえなくて」と躊躇いながら言うのが一杯だった。

「二度も言わせるなよ」

Kは少し苛ついているようだった。

「もしかして、お腹の調子が……」

遠回しに聞くと、

「糞がしたいんだよ」

Kは忌々しそうに繰り返した。

私自身、市販の便秘薬を使うことはあるから、耐え難い便意というのがどういふものかわかっていたし、月明かりに照らし出されるKの顔に浮いた脂汗からも切羽詰まっていることは想像できた。こちらの意思を無視して気まぐれに訪れる便意はときに暴力的で、自身の無力感を思い知らされる。苦しみから、一刻も早くKを解放しなくてはと辺りを見渡すが、河原の道にトイレらしきものは見当たらない。あるのはほんのわずかな街灯の明かりだけで、コンビニどころか人家もない。そうこうしているうちにKは限界を迎えつつあったようで、「糞が、漏れる……」消え入りそうな声で呟くと、背の高い葦の茂みに前傾姿勢で消えていった。どうしていいのかわからず、Kの消えていった茂みに背を向け立ち尽くしていた。

「やってしまった……。ティッシュ持ってないか……」

弱々しい声が聞こえたときは、Kが用を足し終えるまで誰も現れなかったことにホッとしたが、同時にそれは私が想像を膨らませるには十分な時間だった。Kはズボンのなかでそれをやってしまった。しかもきつと緩いものを。ポケットティッシュで事足りるものではない。そう判断した途端、「ちょっと待ってて！」と叫ぶように言い残し、私は走り出していた。五分ほど走るとコンビニの明かりが見えてきて、急いで四ロール入りのトイレットペーパーとトランクスを買ってKのもとへ走って戻ったが、茂みの場所がわからなくなってしまい、小声でKを呼んで探した。

「おーい。ここだよ」

茂みの中からガサガサと現れたKの手に袋を渡し、茂みから離れた。

上空を吹く風は強く、雲が流れるように動いていた。月が雲間に隠れ、辺りがほんのわずか暗くなった。

茂みがかさかさと言を立てて揺れ、Kが出てきた。口を縛ったコンビニ袋を片手に、肩を落として出てきたKは、

「ティッシュ、ありがとう。だけど、このトランクスはなんだ？」

と不思議そうに聞いた。

「え？　だって、やってしまったって……」

恐る恐る言うと、Kは心外だと言わんばかりに、

「漏らしてないよ。僕が漏らしたとも思ったの？」

トイレットペーパーの残りと一緒にトランクスを突き返した。

「そんなつもりじゃなくて……。けど、ごめんさい」

頭を下げたものの、Kはその後ずっと無言で、私が見つまうと言っても応じなかった。

それが直接の原因だったのかわからないが、おそらく、私の精神に対するなんらかの刺激となったのだと思う。Kとの一件があった日から数日経った頃、どういうわけかKの妻の悲しみがリアルに心に迫ってきた。Kの妻はKが不倫をしていると知らないはずだから悲しんではいないわけだが、しかしそれは「悲しみ」という言葉がふさわしいように思えた。まるで自分がKの妻になったような、じくじくとした悲しみが私の心に佇み続けた。実際、動悸やめまいもして食欲不振にもなったのだから、想像上とはいえず、私はほとんどKの妻のようだった。もしかしたら、好きな人の「恥ずべき行為」といえる場面に立ち会ったという事実が、禍々しい経験として私の心に逃避願望を生んだものの、それを認めまいと「Kの妻への配慮」という体（てい）をとったのかもしれない。ようは、Kの妻への哀れみは、私の歪んだ偽善が表出したものだったのだ。いずれにせよ、そのときは、心から（、、、）Kの妻の悲しみに胸を痛めていた。痛みは、私たちは別れなければならない（、、、）、という強迫観

念のようなものに変わり、それから二日後の朝、私はKと別れることを決意した。

Kとの別れを決めた後、一度だけKと会った。

あの(、)日から十日経ったその日は、休日だった。昼過ぎに合流して焼き鳥屋に入ったKと私は、焼き鳥を食べ酒を飲んだ。今までずっと夜の暗がりしか連れて歩かなかったKが、このタイミングで昼間のデートに誘ってくるのが腹立たしかったし、これでKと会うのは最後なのかと思うと未練のような感情が湧いて泣きそうになった。だが、私はKの妻でもあった。心のなかで、Kの妻としての悲しみが苦しいくらいに渦を巻いていた。

「私たち、別れないといけないと思う」

隣で焼き鳥を頬張るKに別れ話を切り出した。

Kは串を持ったまま動きを止めてぼかんと私を見たが、串を皿に置くとジョッキのビールを飲み干し「おなじの」と店員にジョッキを差し出した。

私は脱糞の事実をなるべくオブラートに包みながら、Kの妻の気持ちに気づいてしまったことや妻を裏切り続けるKの罪悪について説いた。

「まるで意味がわからないよ……」

Kはふっとひとつため息をつく、「僕は別れたくないな」と言った。

だが、私の決意は固く、最後は自分でも支離滅裂だと思いつつながら、別れなければならない理由を列挙し続けると、最後にKは、「わかった。今までありがとうな」大きくて分厚い手で私の手を握った。

駅でKと別れたところまでは覚えていたが、酒に酔っていたのか脳が思考を停止させたのか、その後の記憶がほんのわずか途切れている。

気づくと高校にいた。Kとそれぞれの三年間を過ごした母校だ。普段は人で溢れかえっている校門から昇降口へと向かうエントランスの石畳は、真っ赤な夕陽に照らされていて、卒業生が記念に残っていたという石碑が長い影を落としていた。私は、石碑を通り過ぎた先にある花壇の仕切り石に腰をかけ、少しずつ伸びていく、先っぽの尖った影をじっと眺めていた。伸びているように感じたその影は、もしかしたら実際はほとんど伸びてなんかいなかったのかもしれないが、そんなつもりはないのに止まらない涙で滲んだ視界は、見るものすべてを引き伸ばしたように見せるのだった。昇降口の扉は固く閉じられていて、人の気配はなかった。私はこぼれてくる涙を拭うことなく、しばらく影を眺め続けた。

私の感傷と夕陽と静寂のあわいに、ざざっ、ざざっ、という音が入り込んだ。それが人の足音であることも、昇降口の脇の砂利の小道から近づいてくることにも気づいていたが、私はその場を動かなかった。動けなかった。身体力がすべて抜けきってしまったような、気持ちの糸がプツリと切れてしまっただけでその端が風に吹かれて飛んで行ってしまったような、つまり私は

もぬけだった。ざざつ、ざざつという足音が、とん、とん、という石畳を歩く音に変わり、止まった。

「ねえねえ」

頭上から声がした。

動けずにいると、

「ねえ、大丈夫？」

高くて、けれど不快ではない声がした。

ゆっくりと顔を上げると、緑色の服を着た男が立っていた。顔は蒼白でボリュームのある髪は白かった。

「ねえ、人間が一生で流す涙の量はどのくらい知ってる？」

男はゆっくりと私に尋ねた。

黙っていると、男は眼鏡の奥の目尻を垂らして言った。

「人間が一生のうちで流す涙は65リットル。そのうち、たとえば目に埃が入ったときとかあくびをかいた、といった生理現象で流す涙が60リットル。つまり、人間が自分の感情、すなわち喜びだったり悲しみだったり、そうした感情から一生をかけて流す涙の総量は、5リットルだ。まあ、個人差はあるけれどね。ちなみに、涙ひとしずくは2ミリリットルだよ」

「5リットルの涙を流したら、死ぬの？」

「さあ、どうだろう？ キミは死にたいの？」

「ううん。ただ、悲しい」

「だったら、泣きたいだけ泣いたらいいと思うんだ。悲しいっていう感覚だったり感情だったり感傷だったり感知だったり、そうした〈感〉とでもいうものは、生モノなんだよ。生モノは腐らせちゃいけないと思うんだ。ボクが、今のキミのその〈感〉を受け止めるから。さあ、泣いていいよ」

初対面の、素性の知れない男に「泣いていい」と言われたら流れる涙も止まりそうなものだが、私は泣いた。嗚咽をあげて、泣いた。

一ノ瀬佑(いちのせたすく)との出会いだった。

一ノ瀬佑はいつもヴェルディ川崎(後の東京ヴェルディ)のユニフォームを着ていた。ヴェルディ川崎のファンなのかと聞くと、「ファンというわけではないよ。友達からもらって着てみたら着心地が良かったから、自分で三着注文してそれを着回しているんだ。あと、ボクは緑が好きだから」と答えた。背番号12のその緑色のユニフォームは、一ノ瀬佑の白い肌と白い髪によく映えた。身長はそれほど高くはなかったが背筋はしゃんと伸びていて、顔には皺がなく、むきたての卵のように艶やかだった。甲高い声も震えはなくまっすぐで、眼鏡の奥の黒目

がちの瞳はいつも潤いを帯びていた。白髪のせいで遠目に見ると五十代から六十代に見えるが、至近距離で喋っていると若々しい印象を受けた。私たちはあえて年齢を聞くことはしなかった。

そう。私たち(、)、ヤッチとヨッチと私は、あの出会いをきっかけに、しばしば一ノ瀬佑に会い、会話を交わすようになったのだった。一ノ瀬佑は携帯電話や電子メールなどの通信手段を持っておらず、だから連絡を取り合うことはできなかったのだが、一ノ瀬佑に会うのは比較的容易だった。一ノ瀬佑は、一日のほとんどの時間を街歩きをして過ごしていたからだ。一ノ瀬佑が街を歩く本当の理由はわからないが、「ああ、ボクなりの社会参画だよ。馬鹿にする人がいるのは知っている。言いたい人には、まあ、言わせておくよ」そんなふうに飄々と言っていた。

私たちは、三時半に授業を終えると自習室に鞆を置き、街へ出た。特に行くあてもなく歩いていると、ほとんど百パーセントの確率で一ノ瀬佑に遭遇した。そこで、一ノ瀬佑から科学にまつわる雑学や哲学に関する議論の概要をひとつかふたつ聞き、短い会話を交わし、予備校へ戻った。一ノ瀬佑とちよつとした会話を交わすことは、次第に私たちの日常の一部となっていた。

「あの(、)緑の男」

街の人たちは、ちよつとした侮蔑を込めて一ノ瀬佑をそう呼んだ。あの(、)緑の男が働きもせずに一日中街を徘徊できるのは金に困っていないからで、金に困っていないのは、弁護士だったが仕事に飽きて職を辞した(だから貯金がある)からだとか、大手予備校の講師だったがセクハラでクビになった(貯金がある)からだとか、大手飲食チェーン店の御曹司らしい(実家が金持ち)とか、好きなように噂していた。

私たちに一ノ瀬佑にまつわるそうした事柄を教えたのは、3Dの三人組たちだった。例によって休み時間に廊下で集まっている三人組の脇を、喫煙所に向かう私たちが通り過ぎようとする時、

「君たちは、あの(、)緑の男とどういう関係なんだい？」

がっちりとした身体つきをした長身の男が聞いてきた。

私たちの誰もがその問いに答える必要を感じなかったから、そのまま通り過ぎようとする時、

「知ってるかい？ あの(、)緑の男はね——」

別のひよろりとした小柄な男が早口で一ノ瀬佑についての噂話を始めた。私たちは、どういうわけか歩みを止め、それを聞いた。

小柄な男がひと通り話し終えると、

「これって周知の事実なんだけど、君たちは知らないようだから教えてあげるよ。あの(、)」

緑の男はね、ちょっとイカれたやつなんだ。だって、考えてもみろよ？ 一日も休まず、丸一日街を歩いて過ごすなんて、普通の精神のヤツにはできないぜ？」

がっしりした男が演技がかった調子で言い、
「つまりあの(、)緑の男はかなりやばいヤツだから、まあ、関わらない方がいいってことだ」

残りの一人が総括するように言った。

「ちよっとお前ら、なに言ってるのかわかってんの？」

総括した男に掴みかかりそうなヤツチを、「ねえ。やめとこう」とヨツチが制し、私たちはその場を去った。

「あんな連中が医者になるなんて、信じられるか？」

「僕たちの方がよっぽどいい医者になれるよね？」

「少なくとも、禁煙を考えてる人やアルコール依存の人の気持ちはわかりそうだよ」

校舎の裏にある喫煙所でそんな会話をしながら私たちは煙草を吸っていたが、おそらくヤツチもヨツチも、頭の中はさっき聞いた一ノ瀬佑に関する噂話で占められていたと思う。少なくとも、私は、一ノ瀬佑に対する世間の噂や評価に心が痛んだし、どうにかして誤解を解きたいと思っていた。だが、街を歩く一人ひとりに説明して回るなんていうことは現実的でないし、そもそもそんなお節介は一ノ瀬佑が好まないだろう。結局私にできることは、今まで通りの距離を保ち、今までと変わらない関係が続けることだという結論に至った。

梅雨入りが宣言されて数日経った日のことだった。

私たちと一ノ瀬佑の距離が一気に縮まる出来事があった。きっかけは、ヨツチが予備校の他のクラスの子からもらった一通の手紙だった。正確に言えば、手紙というより封筒に入れられただけのただの紙だった。そして、その紙には暗号のような文字列が一行記されているだけなのだった。

LrOhy rBx .

アルファベットであることはわかるが、どこの国の言葉なのか、そもそも意味をなす言語なのか、私たちにはさっぱりわからなかった。

私たちは、その手紙を持って一ノ瀬佑を探しに街を歩いた。ほどなく一ノ瀬佑と出会った私たちは事情を説明して手紙を渡すと、一ノ瀬佑はしばらく眺めていたが、「ああ、これは面白い。実にユニークな女の子だね」と手紙をヨツチに戻した。

「これは、口で説明するのはちよっと難しいから、どうだろう。キミたちの勉強が終わった

ら、もう一度合流しないか？ 紙に書いて説明するよ」

「そしたら、久々にドSで飲もうよ」

「いいね。久しぶりのドSだ」

「ドS？」

一ノ瀬佑が不思議そうに聞いたので、「うちのアパート。メゾン・ド・エスっていうの。通称ドS」と教えると、おかしそうに「ユニークだ。とてもユニークだね、キミたち」と腕を組んで何度も頷いていた。

その夜、一ノ瀬佑と初めてメゾン・ド・エスで飲んだ。一ノ瀬佑もまた、喫煙者だった。私たちは一ノ瀬佑を囲んでコンビニで買った酒とつまみを食べながら、手紙の謎解きを聞いた。

「これは、シーザー暗号とアナグラムだね」

一ノ瀬佑によると、シーザー暗号というのはアルファベットを決まった文字数分シフトさせて暗号を作る手法で、アナグラムというのは単語や文を並び替えることで別の意味の単語や文を作り出す言葉遊びだった。たとえば、「neko (猫)」という文字をシーザー暗号を使って暗号化する場合、後ろに三つアルファベットをずらすと「qhr」となり、同じく「neko (猫)」という文字をアナグラムを使って「Kone (コネ)」と別の意味の言葉にすることができぬ。

L rOhy rBx .

一ノ瀬佑は、プリントの裏紙に大きく手紙の文字を写すと、

「ここに書かれたアルファベットを手前に三つ分シフトしてみるね」と言っ、次のように記した。

LoLev oYu .

「ほら、どうかな？ なにか見えてこないかい？」

一ノ瀬佑の書いた綺麗なブロック体を、私たちはじっと眺めた。

「これってもしかして……」

「ヨッチ、告られたっぼくない？」

一ノ瀬佑は、細い瞳を輝かせながら、「その通り。この文字列には意味はないけれど、それはまあ、ご愛嬌だね」と言うと、無意味な文字列の下にこう記した。

「ヨッチ、やったじゃん！」

歓声が上がると、ヨッチは照れ臭そうに頭をかいた。

「で、どうするの？」

「可愛いって言ってたよね？」

ヤッチと私が詰め寄ると、

「まあ、受験があるから、今すぐに、ってわけにはいかないけど……」

ヨッチはまんざらでもない様子で、それを見た一ノ瀬佑は、「人生は長いから、焦る必要はまったくないね。それにしても、実にユニークな女の子に好かれたキミは実に幸運な男じゃないか」と祝福の言葉をかけた。

翌日、ヨッチが「僕が医学部に合格したら付き合ってほしい」と直接女の子に伝えると、女の子は「え？ あの手紙、もう解けちゃったんですか？」とちょっと驚いた様子で、「解いたらまずかったかな？」ヨッチが聞くと、「なんか恥ずかしいけど、私、待ってます。応援します」と顔を赤らめた。ヨッチは照れながら、そんなふうに報告した。

この日を境に、私たちと一ノ瀬佑は、夜の時間を一緒に過ごすようになった。ヨッチとヤッチの電車の時間があったからそう長くは過ごせなかったが、メゾン・ド・エスに限らずさまざまな場所で酒を飲み煙草を吸った。予備校の隣にある市営駐車場の灯の下や井戸の四阿(あずまや)で語り合い、川辺から月を眺めた。橋の下でギターやブルースハープを奏でたりもした。私たちは一ノ瀬佑から勉強を教わり(一ノ瀬佑は科学の知識に長けていた)、たくさんの雑学を仕込まれた。

一ノ瀬佑の指導が良かったのか、一ノ瀬佑との時間が気分転換となったのか。私たちの模試の成績は徐々に上がっていき、私大の医学部であればB判定を取れる程度になった。一ノ瀬佑はそれを喜んだが、私たちが頭を下げようとすると、「そういうのはちょっと照れるからナシにしようよ」と手で制した。

季節は秋に変わり、メゾン・ド・エスから南へ歩いて数分の場所にメゾン・ド・エムというアパートが建てられた。同じ大家の物件のようで、メゾン・ド・エスと同じ二階建てで、間取りも一緒のようだった。部屋数は少しだけ増え、六戸あった。

「ついに、ドM誕生か」

「ドSに続けてドMって、なかなか攻めるね。エッチの大家さん」

ヤッチとヨッチが言うのと、

「大家さんもそうだけれど、キミたちのその発想は実にユニークだ」

一ノ瀬佑は腕を組んで何度も頷いた。

九月十一日。

その日はたまたまみんなでメゾン・ド・エスにいて、滅多につけないテレビをつけて、見るともなしに眺めながら飲んでいた。そろそろ電車の時間があるからと、ヤッチとヨッチが帰り支度を始めたときだった。さっきまで流れていたドラマの最終回のCMが明けると突然報道番組に切り替わり、女性アナウンサーが緊迫した様子で原稿を読み始めた。

「番組の途中ですが、ニューヨークで大きな航空機事件がありましたので緊急のニュースをここでお伝えします。ニューヨークの超高層ビル、ワールドトレードセンターのツインタワーに、日本時間の今夜十一時五分頃、二機の飛行機が突っ込み、ビルは現在も炎上しています。

二機の航空機が突っ込み、ビルは現在も炎上しています。CNNテレビによりますと――」

テレビの中では、高くそびえるビルの上部から黒い煙が上がっていて、その向こうにあるもう一棟のビルの中腹よりやや上のあたりに別の飛行機が突入して炎を上げる瞬間を捉えた映像が流れていた。まるで、趣味の悪い映画のワンシーンを見ているようで、現実感がちつとも湧いてこなかった。ヤッチもヨッチも一ノ瀬佑も、私たちの誰もが目の前で繰り広げられている映像を理解することができないようだった。誰も一言も発することなく、ただテレビを見つめていた。

「ロイター通信によりますと、パレスチナ解放民主戦線が世界貿易センター飛行機衝突事故で犯行声明を出したという情報もあります。……貿易センタービルに飛行機が激突し、六人が死亡、およそ千人が負傷したということです」

テレビの中では、飛行機がビルに突っ込み炎上する様子をいくつかの角度から撮影したものが繰り返し流されている。

「少なくとも二機のうち一機、アメリカン航空機はハイジャックされていたという情報があります」

アメリカ同時多発テロ事件だ。

その後ふたつのビルは倒壊し、このテロにより二九七七人の命が奪われ、六二九一人以上の人たちが負傷した。それは、私たちの平穏な毎日だったり精神に衝撃を与えるのに十分すぎる事件だった。

その日、ヤッチとヨッチは「予備校の友達の家泊まる」と連絡を入れ、メゾン・ド・エスに泊まった。一ノ瀬佑と私たちは、この事件の映像を見続けた。

「みんな、悪いけど今夜俺につき合ってくれないか？ 話したいことがあるんだ」

ヤッチが珍しく頭を下げてそう言ったのは、同時多発テロから一週間が経った昼食中のことだった。

「もちろんだよ」

「そしたら、佑さんも呼ぼうよ」

私たちは授業を終えた足で街に出て一ノ瀬佑を探して合流し、メゾン・ド・エスへ向かった。酒は買わなかった。

ヤツチはメゾン・ド・エスに着くなり、着ていた長袖シャツをめくり上げ胸をさらけ出した。そこには無数の傷跡があった。「俺、勇気がなくてさ……」と言うヤツチが、ワインオープナーの先端でつけたという傷は、まだかさ蓋にもなっていないく、ピンク色をしていた。

「俺、あれ見てからちよっとムリっぽくてさ。死にたいとか、そういうんじゃないだよ。ただ、痛みってなんだろうな、死ぬってなんだろうなって思ってたさ」

ヤツチはシャツを下ろしながら、誰の目も見ずに呟いた。

「それ、わかる気がするよ。自分の近い人が亡くなったわけじゃないのに、すごく堪えてるんだ、僕も。こんなんで、人の死と向き合える医者になれるのかって、不安になってたんだ」
ヨツチも、誰に向けるでもなく言った。

一ノ瀬佑を見ると、腕を組んだまじつとテーブルの上の一点を見つめていた。誰かの声をじつと待っているようにも、いま自分が発すべき言葉は何か、じっくり考えているようにも見えた。

「たとえば――」

言葉を発したのは、ヤツチだった。

「俺は精神科医になりたいんだけどさ、たとえば患者さんに『死にたい』って言われたら、俺はなんて答えたらいいのかわからないんだ。俺、いま死にたいってわけじゃないけど、ちよつと参ってて……。俺みたいな人が俺以外にいたとして、そのとき俺はなんて声をかけたらいいのか考えて。けど、わからないんだよ」

「『あなたが死んだら、私は悲しい』とかよく聞くけど……」

「勝手に悲しんでくれて思っちゃうんだよ、俺。ひどいかもしれないけど」

「それ、わかる気がする。僕も、なるべく生きようとは思ってるけど、それでもたとえば突発的に死の誘惑に駆られたときに、『私は悲しい』って言われても、余計困ると思う。ああ、僕って人間は、相手を悲しませるような人間なんだって」

ヨツチがヤツチに同意するように言った。

私は言葉を探したが、ヤツチが言うこともヨツチが言うことも、なんだかその通りのような気がして、かける言葉がまったく浮かばなかった。

どこかで犬が遠吠えをした。その犬は繰り返し鳴き続けた。しばらくすると、遠くの方から救急車のサイレンの音が響いてきて、その音はさらに遠くへと去っていった。犬の遠吠えが止み、再び静寂が訪れた。

「ボクはキミが生きていてくれたら、それだけで嬉しいなあ」

一ノ瀬佑が、のんびりとした声で言った。

私たちの視線の先にある一ノ瀬佑の顔はとても穏やかで、薄く笑っているようにも見えた。

「もし、キミが死んでしまったら、ボクは、キミの死をキミと共有することができない。ボクは、キミの不在によってボクに生じた悲しみを共有したい。死んでしまったキミと

(、、、、、、)、ボクの内に広がる悲しみを共有したい。なのに、キミはもういない。ボクはそれをとでも残念に思うんだ。悲しみだけじゃない。ボクはキミとこれからさまざまなことを共有したい。キミの苦しみだって、共有したいと思っっている。キミが生きていないと、それができないんだ。生きていてくれさえすれば、共有できるんだ」

一ノ瀬佑の声や眼鏡の奥の瞳は、話すうちにほんのわずかだが熱を帯びていった。

「けど、それって所詮、相手のためじゃなくて自分本位なんじゃないかな？ 相手は苦しんでるのに僕のために生きてほしいって、ちょっとワガママだと思う」

私が言うと、

「その通り」

一ノ瀬佑は素直に認めた。

「でもさ……」

ヨッチが顔を上げて言った。

「『あなたが死んだら悲しい』だと、僕が言ったように相手にとってプレッシャーになるけど、『あなたが生きていてくれたら嬉しい』だとちょっとニュアンスが変わってくる気がする。なにがどう違うのか、うまく説明できないけど……」

「それってさ、悲しみの先に光はないけど嬉しさの先には希望っていう光がある、みたいな話？」

そう尋ねるヤッチに、

「うん。もしかしたらそれに似てるかも。でも、そんな単純なことじゃない気もするんだよね……」

ヨッチは困ったように答えた。

私たちはそれぞれにふたつの言葉の違いについて考えたが、いつまでも答えは出ないようだった。

「死について語るって、タブーなのかな？」

ヤッチが話題を変えて沈黙を破った。

「どういうこと？」

「もし、俺が自殺したとして、そしたら俺のことはもう、みんな語れなくなるのかな？」

ヤッチが言うと、

「死に触れちゃいけないことにしたら悲しいし苦しくなる気がする。これは生きてる人を優先

した考えなのかもしれないけれど」

ヨッチが答えた。

「それはおそらく、人はいつ死ぬか、という話につながっているね」

一ノ瀬佑はいつものように淡々と言った。

「どうということ？」

「人は、日常で語られなくなったときに、完全な死を迎えるんじゃないかとボクは思っているんだ。日常で語られ続け、日常に溶け込んでいたら、その人は生き続けているような気がするんだ」

一ノ瀬佑はそう言うのと、「そろそろ終電の時間が迫ってきているけれど、ふたりとも大丈夫かい？」と部屋の時計を指差した。

「ヨッチもヨッチも、完全にではないけれど元気を取り戻したようだった。」

「佑さん、ありがとう」

「駅まで一緒に歩こうよ」

そう言って、三人はメゾン・ド・エスを後にした。

その後、私たちがこんなふうな死について語り合うことはなかったが、この夜のことは今でも鮮明に覚えている。

季節はあつという間に冬になり、私たちは受験を迎えた。

結局、私たち三人のうちで医学部に合格したのはヨッチだけだった。東北地方の国立の医学部への入学を決めたヨッチを、ヨッチと私は心から祝福した。ヨッチは、自らの意思で医学部を受験せず、中国地方の国立大学の社会学部へ進んだ。暗号の女の子と同じ大学だった。私は、医学部を受験したものの玉碎し、後期日程で地元の国立大学の人文学部への入学を決めた。地元ではあったが、N市とは離れたところにキャンパスがあったため、メゾン・ド・エスを引き払った。

一ノ瀬佑には街角で報告をしただけで、特にみんなで祝賀会を開いたりはしなかった。

「また、会えるといいね。その日まで元気で」

四人で互いに手を握り合い、一ノ瀬佑と別れた。

引越しの日、大家が訪ねてきた。近所まで来たから部屋の様子を見ていこうと寄ったのだという。

「メゾン・ド・エムから南へ歩いて数分の場所に新しいアパートが建ったんだけどなあ。けっこう立派なんだよ。間取りだって2LDKだしねえ。まあ、また戻ってきたら、よろしくね。十戸あるから、きつと空いていると思うよ」

大家はそう言って部屋を出て行こうとした。

「あの、ちなみにアパートの名前は？」

「メゾン・ド・エルだけど、どうかしたかい？」

S・M・L。

ああ、性癖じゃなくてサイズだったのか。いつかヤッチとヨッチに教えなと。

そんなことを考えていたら、引越し会社のトラックがやってきた。

こうして、私たちはそれぞれの道へと進んでいった。

大学へ入った私たちは、最初の頃は連絡を取り合っていたが、そのうちそれぞれの生活を優先するようになり、疎遠になっていった。一ノ瀬佑は、相変わらず携帯電話もメールアドレスも持たなくて、住所も教えてくれなかったから連絡の取りようがなかった。長期休みに帰省したときなどN市に顔を出して遭遇することはあったが、次第にわざわざN市へ行くこともしなくなり、一ノ瀬佑の存在は私の記憶の奥底へと仕舞われていった。

私は在学中に軽く精神を病み、留年や休学などを経て七年半かけて大学を卒業した。その間に、母を亡くし、子を産んだ。梢と名付けたその子に、父はいない。私はシングルマザーとなった。

*

二〇一八年

B市

大学卒業後、N市の隣に位置するここB市のアパートで、娘の梢と二人暮らしを始めてからこの春で十年になる。娘は小学五年になり、私は四十二となった。

十年前、梢と二人暮らしをすることを実家で報告すると、父は、「ここで一緒に暮らせばいい」と言ってくれたが、妻を亡くした父はすでに新しい女性と実家で暮らしていた。父より五つ年下のその女性は、私と梢によくしてくれた。私はその女性を好ましく思っていたし、赤ん坊の梢もよく懐いていたが、私は当面ひとりやっていけるか試すことを選択した。

「困ったら、いつでも来いよ」

「そうそう。頼ってもらえたら私も嬉しいから」

父と女性は、私にそう言葉をかけた。

知っていてそうしたわけではないが、ヤッチとヨッチも同じB市に住んでいた。

ヤッチは父親の開業するメンタルクリニックで医師として働いていた。

「独身の精神科医って、モテて困るわ」

そんな軽口を叩くヤッチは、患者の話をよく聞いてくれ、優しさをはき違えない診察をする誠実な医師として有名になっていた。B市だけでなく近隣の市町村からも患者が通っているようだった。

ヨッチは、3D時代に暗号で告白された彼女、礼子さんと大学卒業後すぐに結婚をして、礼子さんの地元であるB市に戻ってきていた。十歳、六歳、三歳の三人の子を持つ父となり、B市から車で一時間ほど北上したF市の出版社で編集の仕事をしている。十歳の息子の悠真(ゆうま)は、通う学校は違ったが、梢と同じ小学五年生だった。

梢が小さいうちに、ヤッチの勧めで医師事務作業補助(ドクターズクラーク)の認定試験を受け、ヨッチの助言で校正の勉強をした。結果、ヤッチがまわしてくれるドクターズクラークの書類作成と、ヨッチが与えてくれる校正作業のアルバイト、そして梢の生物学上の父親からの養育費(それなりの額をもらっている)とで、外で働くことをせずに生計を立てることができた。

ときどき、ヤッチとヨッチが私のアパートまで仕事を届けてくれるタイミングが合い、三人が揃うことはあったが、わざわざ場を設けて飲んだり食べたりするといったことはしなかった。ヨッチには家庭があったし、ヤッチに家族はなかったが「死ぬほど忙しい」からだった。梢は、自分が小さな頃からときどきやってきてはちよつと遊んで帰っていくヤッチとヨッチを、最初は不思議に思っていたようだが、今ではすっかり二人に心を許していて、まるで歳の離れた兄妹のような関係にある。知らない大人が入り出す環境にあったせいか、梢は人見知りをしていない社交的な子どもへと育った。学校でも男女の隔てなく友達が多かった。だが、友達同士でつるむことはあまりせず、休み時間などひとりで行動することを好むようだった。

「梢さんは一人でいることが多いですね。それはもちろん立派なことですが、もう少しお友達を信頼してもいいかもしれませんね」

小学四年の頃の担任からはそう言われたが、私はその年齢からひとりで行動できる梢を誇らしく思った。一方で、父親のいない寂しさも抱えているようで、たまにはあるが、眠る前に「ねえ、ママ? 梢はパパが欲しいな……」と涙を見せることもあった。

五月の大型連休が終わってから最初の登校日、学校から戻った梢が唐突に聞いてきた。

「ねえ、ママ? ワープマンって知ってる?」

「ワークマンのこと? ほら、あの作業着とか売ってるお店」

「違うよ。ワープマン」

梢は、隣の塾に通ってるクラスメイトから聞いたという話を、私に聞かせた。

「ワープマンは、いつでもどこにでも現れるから『ワープマン』なんだって。何歳かわからないけど男の人で、背筋をピンと伸ばしてずっと街を歩いてて、いつも同じ緑の服を着ていて――

「もしかして、髪は白くて色白で眼鏡をかけてる？」

鼓動が早くなるのを感じながら、梢を遮って聞くと、

「ママ、なんで知ってるの？」

梢は大きな瞳を丸くした。

「隣町って、N市のこと？」

「そう。友達に通ってるのはN市の塾だよ」

「ワープマンって、有名なの？」

「たぶん、もうほとんどみんな知ってると思うよ。スピーカーのエミちゃんがそこらじゅうでしゃべってたから」

ワープマンというのは、かつて「あのか、緑の男」と揶揄されていた男、すなわち一ノ瀬佑に間違いなかった。

その夜、私はヤッチとヨッチにメールを送った。簡潔に、一ノ瀬佑は一ノ瀬佑のままN市に住んでいるようだ、とだけ伝えようと、二人からほとんど間をおかずに返信があった。ともに「佑さんに会ってきてほしい」という内容だった。

翌日、梢を学校へ送り出して家事を済ませ、家を出たのは十一時頃だった。車で三十分ほど走って到着したN市は、ずいぶんと小綺麗な街になっていた。鬱陶しいくらいに張り巡らされた電線はすべて地中に埋められ空が広くなっていて、道が整備され歩きやすくなっていった。建物も昔からの小さな店は消え、代わりに洒落た店が増えていた。雑多であった十七年前でも一ノ瀬佑は異分子扱いされていたのに、こんなに綺麗に整えられた街に一ノ瀬佑の居場所があるのか心配になった。私は、まるで初めての街を歩くような気持ちで、N市を歩いた。

子どもたちのワープマンというネーミングセンスに敬意を払えばいいのか、一ノ瀬佑は一ノ瀬佑であり続けたと言えよいか。ほんの十分ほど歩いただけで、私は一ノ瀬佑と出会った。年齢を重ねることを忘れた不老の人のように、一ノ瀬佑は一ノ瀬佑のままだった。

「佑さん、お久しぶりです。私が誰かわかります？」

「久しぶりだね、エッチくん。今日は泣いていないんだね」

十七年の空白は、すぐに埋まった。

「連絡を取り合いたいから、まずは連絡先を交換したい」と頼んだが、一ノ瀬佑は相変わらずスマートフォンを携帯していなくて、メールアドレスもないのだと言った。

どうしたものかと考える私に、「ここで立ち話っていうのもナンだから、場所を変えようか」と、一ノ瀬佑に連れられてたどり着いたのは、丘を登った先にある一軒の家だった。

「さあ、着いた」

一ノ瀬佑が言った。

片流れ屋根のその建物は、コテージ風の外観をした横に長い平屋だった。わけがわからず呆然としてしていると、

「ボクの家」

一ノ瀬佑は照れ臭そうに頭を掻いた。

「ええ！ どうしたんですか！」

思わず叫ぶと、

「いやあ、必要に迫られて建ててみたものの、ボクにはちょっと広すぎた感があるね。まあ、どうぞ上がって」

玄関を開けて手招きをした。

玄関を入れて広い廊下を少し歩くと、右手に四畳半ほどの板張りの空間が現れた。壁の一面が全面ガラス張りになっていて、坪庭の緑を眺めながら寛ぐためなのか一脚の椅子と小ぶりの丸テーブルが置かれている。左側に目をやると広い廊下がまっすぐに延びていた。

「ほら、こっちに来てみて」

一ノ瀬佑は、廊下の両脇に配されたりビングダイニングや和室、二十畳ほどの広い寝室、こぢんまりとした書斎、それからにも置かれていない十畳ほどの洋間、トイレと風呂場などをひとつずつ案内した。人や車の往来がある道路側には土壁の塀が据えられ、家と塀との間の空間には砂利が敷かれ苔が植えられていた。動線の描き方や光の取り入れ方、公園の緑を借景として取り入れる大きな窓。ただ外観が凝っているだけでなく、日々の暮らしについて考え抜かれ建てられた家だと、素人の私でもわかる間取りであり造りだった。ただ、一ノ瀬佑が言ったように、ひとりで住むには部屋数が多いのが気になったし、そもそも一ノ瀬佑はそうした無駄を控えるタイプの人間だったから、ひとりで暮らすのにこんなに立派な家を建てたことを不思議に思った。よほど経緯を聞こうかと思ったが、一ノ瀬佑が私とヨッチの子供の話へと話題を移し、タイミングを逸したこともあり、聞けないままその日は別れた。

「エッチくんとヨッチくんに子供がいるだなんて、それはとてもエキサイティングな事実だな。よかったら、エッチくんの子とヨッチくんの子をボクに紹介してくれないか？」

ヨッチとヨッチに送ったメールの最後に一ノ瀬佑の言葉を記したところ、ヨッチからさっそう返信が来た。

「ぜひ会わせてほしいけど、僕は仕事があって、妻は育児で手が離せないんだよね。ねえ、エッチ、申し訳ないけど悠真をお願いできないかな？」

遅れて、ヨッチから、「それは絶対に会わせるといいよ。俺にも子供がいたら面白かったのにな」と返信がきた。

その週末、私は二人を連れてN市へ一ノ瀬佑を訪ねた。車は使わずに、電車を使った。駅に

着き、一ノ瀬佑の家へ向かい歩き始めるとすぐに、緑のシャツを着た一ノ瀬佑を見つけた。

「あ、佑さんッ」と小さく叫ぶと、それに気づいた悠真が、「おい！ ワープマン！」と大きな声で呼び、手を振った。こちらを振り向いた一ノ瀬佑は、大きく手を振り返した。ワープマンというあだ名は一ノ瀬佑の耳にまで届いているのかと驚いたが、一ノ瀬佑は嫌な顔もせず、手を振ったまま梢と悠真のもとへ近づいてきた。

「本物のワープマンだ！」

悠真が興奮気味に言うのと、

「触っていい？」

悠真の興奮が伝染したのか、返事を待たずに梢が一ノ瀬佑の左腕をすりすりとは撫で出した。

「ワープマンの腕、すべすべしてる！」

「僕も触りたい！」

悠真が一ノ瀬佑の右腕を撫でた。

「ホントだ！ 毛がない！」

「ユニークだ。とてもユニークな子供たちだ」

腕を撫でられる一ノ瀬佑は、嬉しそうに目を細めていた。梢と同様、悠真もまた人懐こい子供だった。そして、梢以上に旺盛な好奇心を持っていた。

その日から、梢と悠真は互いのキッズ携帯で連絡を取り合い、一ノ瀬佑の家を訪れるようになった。悠真の家はどうなのか聞いていないが、うちに関しては月五百円のお小遣いとは別に、往復四八〇円の電車を別枠で与えた。

梢と悠真は、平均して週に二日から三日のペースで一ノ瀬佑に会いに行った。そこで何をしているのかといえば、勉強を教わったり、雑学を仕込まれたり、各々の親や学校の愚痴を聞いてもらったりしているようだった。

「ママ、知ってる？ 太陽は昔は青かったんだよ！」

梢は、一ノ瀬佑から教わった雑学を家で披露した。ときには、コンドームの重要性についてだとか糞便にまつわる話とか、エロヤスカトロが入り込んだ雑学を教えられてくることもあったが、それはまったく気にならなかった。むしろ、クリーンな時代の今、一ノ瀬佑が猥雑なもの教える大人であり続けていくくれることに感謝した。

あるいは、私を励ますような言葉もかけてくれたこともある。

「ママが梢を怒るのは、ちゃんと責任を感じてるからなんだね！ 佑が言ってたよ。『責任が生じると、ときに言動がキツくなってしまふんだ。それはある程度仕方ないことなんだよ。キミたちが悪いわけじゃない、それだけ覚えておくといいよ。ボクが優しいのは、キミたちに対して責任がないからで、それは実のところ冷たいことなんだよ』って」

私が梢を怒るのは、ほとんどがそのときの気分だったり自分の思う通りにいかなかったりしたときだったから、それはあまり真実ではないのだが、一ノ瀬佑のその言葉は、少なくとも梢を安心させてくれたようだった。ヨッチからは、「あれから悠真は、妻を『責任一号』、僕を『無責任一号』と名付けて、調子に乗って仕方がないよ。(笑)」とメールが来たが、それもふたりにとって、一ノ瀬佑は面白い大人であり話のわかる大人であり、ガス抜き場となっていたようだった。

「ママ！ 佑は最高だよ！」

一ノ瀬佑の家から帰宅すると、梢はよくそんなふうに言って私に抱きついた。

肌にとわりつくような湿気のなかを三十分も歩いたのがよくなかったのか、学校に着いたときにはじっとりとした汗が額に浮かび、いくらハンカチで拭っても次から次へと湧いてきた。

六月が終わろうとするその日は、月に一度の授業参観だった。木造の校舎は、窓が開け放たれて風が通っていたこともあり、外に比べれば涼しく感じたが、それでも額や首筋を流れる汗が止まらず、梢の教室に着いたあとも教室内には入らずに廊下の窓辺で風を受けて身体を冷やしていた。各々の児童の親が、授業が始まるまでの時間を、輪になって喋ったり、二、三人で掲示物を眺めたりしながら過ごしていた。私はママ友と呼べるような友達はおらず、かといって、ママ友いじめに遭っているわけでもなかった。気が向いたときにこちらから話せる母親は何人かいて、けれど、ひとりしていると彼女たちは特に話しかけてくることはしなかった。

その日、私はひとりで涼んでいたのだが、隣のクラスの廊下から五、六人の輪になった母親たちの大きな声が聞こえてきた。

「子供を家に連れ込んでるらしいよ？」

「そうなの？」

「私も聞いたことある。なにしてるかわからないよね」

「え！ いたずらってこと？」

「そこまではわからないけど、もしかしたらってこともあるよね」

聞くつもりはなかったが、母親たちの声は内輪の話をするにしては大きすぎた。まるで、周りのみんなに聞いて欲しいような印象を受ける、そんな会話だった。

「あの緑の人でしょ？」

「そうそう。いっつも緑なんでしょ？」

「気味が悪いよね」

「衛生的にもどうかと思うし」

「まあ、N市でよかったよね」

「ホント、そう。学区内にいたら、即通報だよね」

暑さのせいではない、別の汗が内側から湧いてくるのがわかった。身体はほてっているに冷たいような汗だった。鼓動が早くなるのを感じ、私はその場を離れ教室に入った。ほぼ時を同じくして、授業開始のチャイムが鳴った。

梢と悠真は一ノ瀬佑の家に通い続けた。二人とも理科と国語の成績が上がり、どうでもいいような雑学をどんどんと身につけていった。夜の食卓で梢が話すことは、一ノ瀬佑から仕込まれた雑学クイズで占められるようになり、私までどうでもいいような雑学が身につけていった。

- ・ 刺激がなくなると人は狂ってしまうこと
- ・ 自分で自分をくすぐることができない理由について
- ・ 本屋で便意をもよおす現象には名前があり、「青木まりこ現象」ということ
- ・ ロフタスの偽記憶実験について
- ・ 人が退屈する理由について
- ・ 大腸を伸ばすとテニスコート半面、小腸はテニスコート一面分の面積になること
- ・ 和式トイレの流れる部分が川のようにつながっていて、前方の個室を使っている人のうんちが流れてきて自分の下を通過していくタイプのトイレが、昔の学校にはあったこと
- ・ 「グリマルデイ人(じん)」と書いた紙を音読させると、どんな美男美女でも間抜けにみえること

覚えているものだけを書き出したのだが、どれも本当にどうでもよいようなもので笑ってしまう。確かに一ノ瀬佑は、いつも同じ服を着ているし(実際は同じ形の違うものなのだ)、常に街を歩いていて神出鬼没のようだったし、年齢も不詳で怪しく見えたかもしれないが、実際に一ノ瀬佑と関わったことのある私たちは、こういうどうでもいいことを楽しそうに話すところが一ノ瀬佑の魅力であることを知っていた。そして、私たち、梢と悠真とヤッチとヨッチと私は、一ノ瀬佑のそんなところがとても好きだった。

私の聞き知らぬところでどんなことが言われていたのか、あるいはなにを噂されていたのか、それはわからないし、そもそも私たちのことなど誰も話題にしなかったかもしれない。いずれにせよ、平穏なまま一年が過ぎ、梢と悠真は六年生になった。

*

二〇一九年

夏

A 高原

「キャンプに行こうと思うのだけど」

そう言い出したのは、一ノ瀬佑だった。

一ノ瀬佑の色の白い肌だったり、線の細い身体だったり、丸い緑の眼鏡だったり、そうしたものがアウトドアとはまったく結びつかなくて、思わず、「キャンプって、あのキャンプのこと？」と聞くと、「今は野球のキャンプのシーズンではないことは確かだけれど」一ノ瀬佑は、いたずらを仕掛ける少年のような瞳で言った。

「はいはい。わかりました。どうぞ子供たちとキャンプに行ってください。で、どうやっていくの？」

「それなんだけど、キミに運転を頼めないかな？」

「え？ 私も行くの？」

「ダメかな？」

一ノ瀬佑がキャンプのことを梢と悠真に話すと、二人は跳んで喜んだ。

「いつ？ いつ行けるの？」

「どこ？ どのキャンプ場？」

梢と悠真が一ノ瀬佑の両腕を引っ張ると、

「それは梢くんのお母さんに聞いてもらおうか」

一ノ瀬佑は私を見ながら目を細めた。

キャンプに行こうと提案したものの、いざ行くことが決まると、一ノ瀬佑はなにもしなかった。すべてを私に任せ、自分は街を歩くか、梢と悠真の相手をするかしているだけなのだった。

N市から車で二時間ほど南下したところにあるA高原に決めた。バンガローがあったからテントを張らずに済んだし、バーベキュー用の食材もお金を払えば用意してくれるようだったし、調理場も完備されていた。そしてその高原は、星が綺麗に見えることで有名だった。

夏休みに入った最初の週の金曜日、私たち、梢と悠真と私の三人は、早朝六時にB市を出発し、N市で一ノ瀬佑をピックアップし、A高原を目指した。

一ノ瀬佑は、一泊のキャンプ（しかも泊まりはバンガロー）なのに、まるで縦走でもするよいうな荷物を背負って玄関前に立っていた。おまけに、ギターが入っているであろうソフトケースまで抱えていた。

「なにをそんなに持っていくの？ トランクに載るかな？」

私がトランクにスペースを作っていると、

「エッチくん。まあ、楽しもうか」

一ノ瀬佑は、もったいぶるように言った。

到着する頃には、太陽はすっかり夏の輝きを放っていたが、さすが高原というだけあって、暑さはまったく感じなかった。私たちはまず、事務所へ行き、簡単な書類に記入し（私が書いた）、代金を払い（一ノ瀬佑が全額を出した）、バンガローの鍵をもらった。バーベキューの食材は夕方に取りに来るようにとのことだった。

事務所から少し歩いたところに炊事場があり、その先にテントも張れてバーベキューもできるキャンプ場があるのだと職員が教えてくれた。私たちが泊まるバンガローは、炊事場とは逆の方向にあった。私たちはバンガローを目指し、坂を登った。道は綺麗に舗装されていて、事務所でもらった地図によると、キャンプ場全体を歩いて一周できるようになっていた。道を脇に外れると湖や沼があったりするようだった。うっすらと汗ばみ出した頃、私たちは坂を越えた。そこは平らな緑地で、バンガローが建っているのが見えた。大きさや形がまちまちのバンガローは全部で五棟あり、きちんと距離を保って建っていた。

私たちのバンガローは、向かって右端にある二番目に小さなものだった。梢と悠真は、バンガローが見えたあたりでもう駆け出す準備をしているようで、

「どれ？ ぼくたちのって、どれ？」

「早く着いた方が上のベッドね！」

まるで小学校低学年のようなやり取りをしていた。

バンガローは小ぶりながらも三階建てだった。木製の階段を上った先にある玄関に入ると、そこは建物の二階だった。入るとまずキッチンがあり、それを囲むようにテーブルが据えられていた。奥にはトイレと大きな風呂があった。星を眺めるためか、風呂は天井側の上半分がガラス張りになっていた。「大きいお風呂！ これなら四人で入れるね！」と興奮する悠真を、「ありえない。男子組と女子組は別々ね」梢がいなした。一階には暖炉があり、その前にはみなでくつろげそうな大きなテーブルがあり、それを囲むようにゆったりとしたソファが置かれていた。その隣の部屋が寝室だった。二段ベッドが二組あるだけの簡素な部屋だった。三階は屋根裏のような小部屋で、二人がけのソファが二脚とローテーブルが一卓あった。

バンガローをひと通り見終えた私たちは、辺りを散策することにした。地図によると、バンガローの先には森が広がっていて、そこを抜けていくと沼地があった。まずはそこを目指すことにした。

鳥や蝉の鳴く声を聞きながら、夏休みの自由研究について話しながら森を歩いた。森を抜け

たあたりで、

「底なし沼だったりして！」

悠真がワクワクした様子で言うと、

「そういえば、昔、ボクの友達がおしきけて沼地に入ったら底がなくて、みるみる身体が沈んでいって、ああ、もう自分はおしまいだ、と思ったところで記憶をなくしたということがあったな。結局、無事救出されて、こっぴどく怒られたようだったな」

一ノ瀬佑が思い出すように言った。

「え？ 底なし沼って、ファンタジーじゃないの？」

そう聞く梢に、

「そう思うよね。実際は、底はちゃんと存在する。けれど、いったんハマったら抜け出すことのできない沼のことを、その恐ろしさを込めて『底なし沼』と呼んでいるんだ」

一ノ瀬佑が言った。

「ハマっちゃったら助からないの？」

「難しいみたいだね。まず、もがかない。それが大事と言われているけれど、まあ、もがいたりやうよね」

「もがいたらどうなるの？」

「身体が砂や泥に真空パックされたような状態になる」

「苦しそう！」

「苦しいだろうね」

そんな会話をしていたら、沼についた。沼は、夏の光を受けててらと怪しい光を放っていた。実際の沼を目の前にした悠真が、「ぼく、怖い！」と怯え出し、梢も「落ちたら大変！」と怖がった。

「一刻も早くここを去ろう！」と言う悠真に従うように、私たちは沼を周遊することを止め、沼に落ちないよう一歩一歩足を確認しながら沼地を後にした。

舗装された道に戻ると、両脇から腕を伸ばすように木々が覆いかぶさり木陰を作っていた。鳥がさえずるのを聞きながら、私たちは右周りに一周するようにキャンプ場を目指し歩いた。キャンプ場が近づいてくると、一ノ瀬佑は「キャンプ場で待ってもらえるかな」と言い残し、バンガローの方へと消えていった。

キャンプ場に現れた一ノ瀬佑は、大きな布の袋を抱えていた。

「じゃあ、作ろうか」

そう言って取り出したのは、てっぺんにプロペラがはめ込まれた木製のボウルと小刀と木の棒だった。

「なにこれ？」

「ギココプターだよ」

「ギココプター？　なんかタケコプターみたいだね」

「そう。ドラえもんのだけコプターにヒントをもらったんだ。これ、梢さんと悠真さんの頭のうちうど良いと思うんだけど、どうだろう？」

二人が木製ボウルをかぶると、一ノ瀬佑の言うようにぴったりだった。

「この木製のボウルにギザギザを刻んでこの木の棒でこすると、てっぺんのプロペラが回るんだ」

「え！　ぼくたち、飛ぶの？」

悠真の質問には答えず、一ノ瀬佑は「さあ、始めよう。手を切らないように気をつけて」と、小刀を梢と悠真に渡した。

私は梢を、一ノ瀬佑は悠真を助けながら黙々と削り続け、昼前には木製ボウルにギザギザを刻み込むことができた。

「よし。あとは、ギココプターをかぶってこのギザギザを木の棒でこするだけだ」

梢と悠真は待ちきれないといった様子で、一ノ瀬佑が言い終えるのを待たずに木製のボウルをかぶりギザギザを擦りだした。緑が揺れる高原にギコギコという音が響いた。

「もつといっぱいこすってみようか」

一ノ瀬佑に言われ二人が擦り続けると、頭の上のプロペラが回り始めた。

「あ！　梢ちゃんのギココプターが回り始めた！」

「悠真くんのも！」

「ぼくたち、飛べるのかな！」

もちろん飛べるはずはなく、プロペラが頭上で回り続けるだけだった。

「なんだ、飛べないんだ」

「私は最初からわかってたけどね」

そう言う二人は、ちっとも残念そうではなかった。自分たちで作ったギココプターのプロペラが回った、それだけで嬉しいようだった。二人はいつまでも、ギコギコという音を高原に響かせていた。

昼はバンガローに戻って、持参したレトルトご飯に鍋で温めたレトルトカレーをかけて食べた。

「午後はなにをするの？」

悠真が聞くと、

「綿あめでも食べないか？」

一ノ瀬佑が提案するように言った。

「綿あめ！ 私、大好きだよ！」

梢が言うと、

「よかった。そしたら、食後の一服を終えたら、さっそく取りかかろう」

一ノ瀬佑は、煙草を持って外へ出て行った。

戻ってきた一ノ瀬佑がリュックサックから取り出したのは、小型のハンドミキサー、茶こし、小さな段ボール、アルミホイル、一人用ホットプレートなど、ここからどうやって綿あめを作るのか想像もつかないものばかりだった。

午前中のギコプターとは違って、四人で協力してひとつの綿あめ機を作るのだと言った。まず、小型のハンドミキサーの先っぽ、攪拌する部分をペンチで切り落とした。次に、茶こしに切り込みを入れる。縦五ミリ、横一センチほどのほんのわずかな切り込みだ。それから、細工をしたハンドミキサーと茶こしを「虫ゴム」と呼ばれる細いゴムチューブで連結する。最後に、茶こしの直径より大きめに切ったアルミホイルを茶こしの枠に蓋をするようにしっかりとくっつける。これで、ほとんど綿あめ機は完成したようなもので、あとは、茶こしの切り込みからグラニュー糖を入れて、ホットプレートに茶こしのアルミホイル部分をくっつけ熱し、グラニュー糖が溶けたら組み立てた段ボールの中でハンドミキサーのスイッチを入れる。すると、茶こしの網目から細い白い糸状の飴が出てくるから、それを割り箸で巻き取る。そんな仕組みなのだ。一ノ瀬佑は説明した。

「さあ、第一号は誰かな？」

「私やりたい！」

「いいよ！ 梢ちゃんが第一号だ！」

梢は軍手をはめて割り箸を持ち、スタンバイする。

「じゃあ、始めよう」

グラニュー糖を入れたハンドミキサーをホットプレートにつけると、間もなくグラニュー糖はみるみる溶けてアメーバのように形を変えた。それを確認した一ノ瀬佑が、ハンドミキサーを段ボールの中に移してスイッチを入れると、回転する茶こしから白い糸のようなものが段ボールの中を浮遊し始めた。

「うわあ、キレイ！ 雲みたい！」

思わず歓声をあげる梢に、

「梢くん、ほら、割り箸で巻き取ろうか」

一ノ瀬佑が声をかけた。梢は、すじ雲のような飴を巻き取っていく。飴は段ボールの中で割り箸に巻き取られていき、ふんわりとした雲のような綿あめが完成した。不格好で小ぶりだったが、それは確かに綿あめだった。

悠真も試し、私も作った。

「ただのお砂糖なのに、なんでこんなに美味しいんだろうね」

梢が言うように、口の中に広がる素朴な甘さは、今まで食べたどの綿あめよりも美味しく感じた。

「綿あめ作り、楽しかったね！」

「大成功だったね！ またやりたい！」

私たちが綿あめを食べながら話していると、

「実験（、）はまだ残っているよ」

「実験」の二文字を強調するように、一ノ瀬佑が言った。

「え！ これって実験だったの！」

梢が驚いたように言い、

「もしかして人体実験？」

悠真が早口で続いた。

「確かに。ギコプロプターは私たちの頭を使ったし、綿あめ機は私たちの舌を使ったから、人体実験だ！」

「どうする梢ちゃん！ ぼくたち人体実験されちゃったよ！」

悠真と梢がはしゃぐと、一ノ瀬佑は宇宙人による人体実験の逸話を披露して、さらに二人を興奮させた。

夕方の実験は、電気パン作りだった。「電気パン」というのは、金属製の板を貼って電極を通した箱にパン種を流し込み、電気を通して作る蒸しパンのようなものだった。

「これは、ちょっと危ないから、パン種を作って焼き機に流しこむところまでを二人にやってもらって、あとはボクがやるからみていくれるかな」

濡れた布巾を箱に敷いてそこに二人がパン種を流しこむと、「それじゃあ、焼くでしょう。くれぐれも手は出さないでね」一ノ瀬佑は電極をつなげて電流を流し始めた。

しばらく眺めていると、箱の中の淡い黄色のパン種はじわりじわりと膨らんでいった。

「このまましばらく放っておけば、そのうち水分がなくなったら自動的に電流が切れてパンが焼き上がるんだ。さあ、あっちで待とう」

一ノ瀬佑はそう言うで一階へと移動し、テーブルにランプを広げた。

「まずは記憶力で勝負をしようか」

「何するの？」

「神経衰弱というゲーム、知ってるかな？」

「知ってる！ ぼく、得意だよ！」

その言葉通り、神経衰弱は悠真の圧倒的勝利だった。神経衰弱のあとは、大富豪、七並べ、ババ抜きと続けた。大富豪は波乱に満ちた逆転に次ぐ逆転で、最後は梢が勝利した。七並べは

いち早くみなの手持っているカードを把握した一ノ瀬佑が、ハートの3とスペードの8とダイヤの2を出さないという作戦で早々に勝ち抜けた。ババ抜きでようやく私に運が回ってきた。配られたカードに揃いの札が多く、三枚の持ち札でスタートして勝った。みながそれぞれに喜んで悔しがったりしていると、キッチンからいい香りが漂ってきた。時計を見ると、一ノ瀬佑の言った通りちょうど一時間ほどが経っていた。

「よし。電流が切れてる。焼けたようだね。取り出すのはちょっと冷ましてからにしようか」

私たちは、ジジ抜きを二回して、パンから粗熱が取れるのを待った。

「まだ熱いからボクがやるね」

一ノ瀬佑は布巾の端を持ってパン焼き機からパンを取り出した。そのまま板の上に乗せると、私たちの前でパンをちぎって見せた。ちぎられた電気パンはふわりと膨らみ、そこから甘い匂いの蒸気が上がった。

「少しずつしかないけれど、この後にバーベキューが待ってるから良しとしようか」

私たちは、一ノ瀬佑の両手から少しはみ出るくらいのサイズの電気パンを、四人で分けて食べた。さつき食べた綿あめよりもさらに素朴な小麦粉の甘さが口の中に溶けていった。

事務所でバーベキューの食材を受け取って調理場に着いたのとほとんど同じ時刻に、太陽が彼方の山へ沈んでいった。私と梢が調理場で野菜を切り、悠真がキャンプ場にあるバーベキュー会場へと運んだ。一ノ瀬佑は火を熾し、網の温度を調整していた。

左の方、少し離れた場所で学生らしき団体がキャンプファイヤーを囲んで酒盛りをしていて、後方では白くて長い髭を蓄えた老人（もしかしたら、一ノ瀬佑のように老いて見えるだけかもしれない）が、二十代から六十代くらいの女性たちを十人ほど、自分を囲むように座らせてなにかを説いていた。女性たちはみな真剣な眼差しで、中央で座禅を組む髭の男の話を聞いていた。

意外なことに、一ノ瀬佑は肉や野菜を焼くのがとてもうまかった。一ノ瀬佑の焼く肉を、私たちは次々に食べた。

「佑さんの分も取っておかないと」

私が一ノ瀬佑の皿に肉を取ろうとすると、

「ボクのことには気にしなくて大丈夫。君たちはこれからの人たちなんだから、ほら、たくさん食べて」

年寄りのようなことを言いながら、私たちの皿に柔らかく焼けた肉を載せていった。

キャンプファイヤーの若者たちが肩を組んで「燃えろよ燃えろ」を歌い出すと、

「あ、懐かしい。これ、去年の学年キャンプで、みんなで歌ったんだ」

梢が懐かしそうに、若者たちに合わせて口ずさみ出した。

すると、隣で肉を食べていた悠真が、

「梢ちゃんが歌うのは問題ないよ。だって小学生だから。けど、あんない年した大人が歌うのって、ちょっとないと思うなぼくは」

真顔で真つ当な突っ込みを入れて、一ノ瀬佑と私は、飲んでいたビールを思わず吹きだしそうになった。

後方から高音と低音を同時に発しているような聞きなれない声が聞こえてきて、見ると、座禅を組んだ老人が目を閉じて、口を奇妙な形に動かしながら体をゆらゆらと回していた。周りを囲む女性も老人に合わせるように体をゆらゆらと揺らしていた。

「これってホーミーじゃない？」

梢が言うと、

「ってことは、あのおじいさん、モンゴル人？」

悠真が老人を指差した。

「ホーミー？」

私が聞くと、

「モンゴルの伝統的な歌唱法だよ」

「梢ちゃんも習ったんだ！ ぼくは音楽の授業で聞いたよ！」

二人が教えてくれた。

「ねえ、梢さんと悠真くんもなにか歌うかい？ よかったら、ボク、伴奏するよ」

一ノ瀬佑が火元から離れたところに置いてあったギターを取りに行くと、二人はその気になったようだった。皿を置き、相談を始めた。

二人が選んだのは、音楽会で定番の合唱曲だった。

「これ、去年の音楽会で歌ったんだ」

「ぼくも、去年の音楽会、この曲だったんだよ！」

一ノ瀬佑は、「よし。じゃあ歌おうか」と、ギターを弾きだした。楽譜も見ずに、すらすらと爪弾いた。

二人の声と一ノ瀬佑のギターの音色が、涼しい風に乗って高原へ広がっていく。空を見上げると満天の星空だった。濃紺の空に浮かぶひとつひとつの儂い光が、ゆらゆらと瞬いていた。それは美しさに感動を覚えるというより、むしろ少し不気味なほどに闇をびっしりと埋め尽くしていた。

バンガローに戻り、男子組と女子組に分かれて風呂に入った。風呂の窓からは空の星がよく見えた。梢は星空に感動していたが、私はなにか見られているような気がして落ち着いて湯につかることができなかった。風呂から出た私たちは、三階の小部屋でおしゃべりをして過ごしていたが、梢と悠真があくびを始めたのを機に、二人を一階の寝室へと促した。夕飯を食べな

がら二段ベッドの上か下かで揉めていた二人だが、結局、悠真が下へ梢が上へと自然に移動した。一ノ瀬佑が二人の枕元で雑学を披露していると、程なく二人は眠りに落ちた。

私と一ノ瀬佑は三階の小部屋に戻り飲み直した。窓からは夏とは思えないひんやりとした空気が流れ込み、部屋を冷やした。ナッツとチーズをつまみに、ウイスキーをストレートで飲んだ。私たちは、これまでに読んだ小説で面白かったものを紹介しあうことにした。初めての試みだった。互いに三冊ずつ、オススの本のタイトルと著者をそれぞれ三枚の紙に書き、その紙を裏返し、相手は三枚の中で一枚だけ選べる。選んだ紙に書かれた本について、相手からレクチャーを受けることができる。そんな方式を採った。私は数年前の文芸誌に載った中編を引き、一ノ瀬佑は私が引いた本のさらに数年前の文芸誌に載った中編を引いた。ともに同じ文芸誌で、同じ作家の書いた別の作品だった。

「こんな偶然ってある？」

「実に、奇跡的な偶然だ」

私たちはすでに読んだことのあるその作品の良さについて、ひとしきり語り合った。

「——ところで、エラーといえ、昼間の沼の話、もしかして佑さんの友達の話じゃなくて佑さん自身の経験だったりする？」

根拠があるわけではなく、なんとなく聞いただけだった。

「あれは正真正銘、友達の経験だよ」

「そうだよ。変なこと言ってゴメンなさい。で、『神様のエラー』の話だけ——」

話題を戻そうとする私に、

「ボクが落ちたのは、沼じゃなくて凍った湖だ」

一ノ瀬佑が言った。

「あまり記憶にないのだけれど、ボク、小さな頃に凍った湖に落ちたんだ」

一ノ瀬佑とこれまでにたくさん話をしてきたが、こんなふうにプライベートを聞くのは初めてのことだった。ウイスキーを一口舐めると、一ノ瀬佑は話し出した。

「それほど大きな湖ではなかったけれど、小さくもなかった。ちょうど、今日行った沼くらいの大きさだった。ボクは慎重な子供だったから、湖の端を足で何度も踏みしめて、しっかりと凍っていることを確かめてから中央へと進んでいった。分厚いと思っていた氷の厚さは、実は均等ではなかったんだ。突然、足元がストンと落ちて、ボクは冷たい水の中へと閉じ込められた。冷たいってというのは嘘だな。恐怖で冷たさなんか感じていなかっただろうからね。そのときのことはよく覚えていないんだ」

そこまで話すと、一ノ瀬佑は箱から煙草を取り出して火をつけた。窓まで移動して、煙を外へと吐き出しながら煙草を吸った。私は黙って一ノ瀬佑の話の続きを待った。

一ノ瀬佑は、丁寧にまるまる一本吸い終えてから、こう言った。

「だから何、って話じゃないんだ。ただ、ボクはあのとき、暗闇を目指して泳いだらいいんだ。聞いた話なのだけれど、氷に塞がれた水の中からは、氷の割れ目は暗く見えるらしい。普通、人間はパニックになったら、光を求めるものだろう？　だから、氷の張った湖や池に落ちた人間は大抵明るいところを目指して泳いでしまう。でも、そこにあるのは分厚い氷だ。光の先に待っているのは死なんだ。普通に考えたら、ボクは光を求めて泳いで死んでいたはずなんだ。ボクが助かったのは、ボクが暗闇を求めて泳いだからだったらしいんだ。闇の先に〈生〉という光があったというわけだ。親も教師もカウンセラーも、みんな口を揃えて同じことを言ったよ。『お前は賢い子だ』って。僕にはそんな知識がなかったというのに。この話にオチはないよ。これで終わりだ。さあ、そろそろ寝ようか」

一ノ瀬佑が自身について語ったのは、後にも先にもこれきりだった。今でもときどきこの話を思いだし、一ノ瀬佑は私になにかを伝えようとしたのではないかと考えるが、それが何であるのかまったくわからないままだ。一ノ瀬佑が言ったように、本当にオチなどないのかもしれない。あるいは、すべてにオチを求めようとするその態度を改めよ、というメッセージが込められているのかもしれない、と考えるのは深読みしすぎだろうか。

その夜、夢を見た。夢の中の私は押入れの中にいて、細く開けられた襖から漏れるわずかな光が、幼い私の顔を照らしていた。夢の中の私はじっとしたまましばらく光を受けていたが、ふと何かに気づいたように襖に両手ををかけ、一気に横へと引こうとした。そこで目が覚めた。

梢と悠真は夏休みの残りもときどき一ノ瀬佑を尋ねたが、私はヤッチやヨッチが与えてくれた仕事を立て込んでいて、しばらく一ノ瀬佑と会えない日々が続いた。

季節が秋になり冬に変わっても、梢と悠真と一ノ瀬佑の交流は淡々と続いた。梢の話によると、その頃には、梢が別の学校の男子と二人で一ノ瀬佑の家を訪れているという噂が学校中を流れていたようだった。梢は興味本位で質問を受けたり、好奇の目を向けられているようだったが、担任の先生に相談するかと尋ねると、「言わせたい人には言わせておけばいいんだよ、ママ」と、優しく諭された。

*

二〇二〇年

それはなんの前触れもなくやってきた。
新型コロナウイルス。

ウイルスが太陽のコロナに似た形をしているためにそう名付けられたこの病は、私たちの生活を一変させることになる。

政府からの発表があった一月の時点では、私自身あまりことの重大さに気づいていなかったが、県内で二名の感染者が発生し、二月最後の金曜日に、三月、つまり週明けから学校が一斉休校すると決まった頃には、これは大変なことが起きているのかもしれない(、、、、)と思うようになった。ニュースでは、連日、新型コロナウイルスの拡大の様子が時間を延長して報道されていたが、それでも、私にとって新型コロナウイルスは対岸の火事であり、テレビに映し出される数字からウイルスの脅威を感じ取るには至らなかった。

さすがに梢と悠真を二人きりで電車に乗せることはしなかったが、代わりに二人を車に乗せてN市へ行き、駐車場に車を止め街を歩いた。そして、一ノ瀬佑と会い、駐車場へ戻って四人で車に乗り込み、一ノ瀬佑の家とともに過ごした。

一ノ瀬佑の家へは週に三日くらいのペースで行った。悠真が持ってきた運動系のテレビゲームで身体を動かしたり、一ノ瀬佑が用意したレーザーヘッドや石鹸水でチンダル現象の実験をしたり、梢が作ってみたかったという「やしようま」という甘菓子を作ったりした。買ってきた食材を使ってみんなで昼食を作り、一緒に食べた。そのうち、梢と悠真が自主的に「時間割」のようなものを立てて、一ノ瀬佑と私がそれに従うように動いた。一ノ瀬佑と私は、二人の勉強の先生になったり、遊び友達になったりした。

ときには、朝早く合流してみんなで弁当を作り、私の運転で里山へ出かけたりもした。有名な公園はみな、時間を持って余す子供や付き添いの親たち、あるいは県外から居場所を求めてやってくる親子連れで賑わっていたようだが、山には人がいなかった。代わりに、鳥がいて猿がいた。狸を見たときはみんなで興奮したし、なにより、緑が美しかった。

「世の中の騒動が嘘のようだね。やっぱりボクは緑が好きだな」

一ノ瀬佑は、昔のむす森に広げたシートの上に寝そべり、気持ちよさそうに伸びをした。一ノ瀬佑の両隣には、梢と悠真が同じような格好で寝そべっている。

「うちの学校、六年生を送る会、中止だっつて」
「うちの学校は、謝恩会も中止だよ」

「たぶん、うちの学校もそうなるだろうな」

「卒業式、できるのかな」

「なくなればいいのに、卒業式」

「卒業、したくないな」

「二人とも、それはどうして？」

「ずっと小学生でいたいよ。中学校、怖そうだし」

「ぼくもこのまま小学生でいたいな」

「規律とか自主の心とか、面倒だし」

「佑と遊ぶ時間も減っちゃうし」

「リニューネンしよっか？」

「いいね！ ぼくもリニューネンしたい！」

「留年？ 二人とも、どこでそんな言葉覚えたの？」

「ああ、ボクが教えたんだ」

「人生はのんびりリニューネンしながら過ごすのも悪くないんだよね、佑？」

「今からのんびりリニューネンしよう！」

私たちは、三月の臨時休校をこんなふうに過ごした。

梢の小学校の卒業式は、規模を縮小してクラス別に執り行われた。出席を許されたのは、各家庭保護者一名と限られた教職員、そして卒業生のみだった。

「なんだか、廃校を迎えた分校の卒業式みたいだね。ちょっと寂しかったけど、まあ、記憶には残るだろうな」

卒業式を終えた梢は、そんなことを言っていた。四月から毎日着ていく予定の制服はまだぶかぶかで、あと数週間で中学生になることが信じられなかったし、そもそも四月から学校が始まるのかもよく分からないような状況だった。

同じ日に卒業式があった悠真とヨッチを乗せて、四人で一ノ瀬佑のN市を訪ねた。二人の制服姿を初めてみる一ノ瀬佑は、「二人ともとてもよく似合っているよ。ところで梢くん、悠真くん。それを着ているということは留年に失敗したんだね」と笑った。

三月末の卒業式から四月初めの入学式までのわずかな期間も、一ノ瀬佑と何度か会った。家で過ごしたり、緑を浴びに山へ行った。

中学校の入学式は予定通り行われたが、規模は縮小され、新入生とその保護者各家庭一名、それから教職員のみに参加だった。みなマスクを着用していて、しかも緊張からか目に表情がなく、カメラに収めた写真を見返すと、入学式というより何か別の怪しい儀式のように見えた。

入学はしたものの、登校二日目の夜に臨時休校が決まった。七都道府県を対象とする緊急事態宣言を受けての措置だった。新型コロナウイルスの感染は拡大の一途をたどっていて、四月十六日には政府から全国に向けて緊急事態宣言が発せられた。

三月の臨時休校は、正直なところ、私も子供たちも、いわゆる「コロナハイ」のような状態になっていた。一ノ瀬佑に会うためにN市に出かけたし、みんな山へも行った。マスクの着用にもあまり気を配らなかった。だが、緊急事態宣言のもとでなされた今回の臨時休校において、私にハイになる余力は残ってなかった。かといって、過度に深刻になるわけでもなかつ

た。ただ、一ノ瀬佑に会うために梢と悠真を連れてN市を訪れることはしなくなった。

新型コロナウイルスが流行りだしてから、一ノ瀬佑は一度もマスクをしなかった。感覚過敏でマスクができなかった、というののちに知ったことだが、マスクを着用しない一ノ瀬佑をみなは怖れた。一ノ瀬佑が歩くと、人の波が割れた。まるでモーセの十戒のようだった。緊急事態宣言が全国に発令される頃には、N市から多くの人が消えた。みな外出を極力控え、移動するのにも車を使ったからだ。飲食店は休業を余儀なくされた。シャッターが下ろされ人の消えた街は、まるでゴーストタウンのようだった。そのゴーストタウンのような街を、一ノ瀬佑はいつものように緑のユニフォームを着て歩いた。

私がこの期間の一ノ瀬佑について、こんなふうに詳細に把握しているのは、梢のクラス之母親たちで作ったグループLINEに入っていたからだった。

「卒業してもまたみんなで会いたいから、よかつたら六年二組のグループLINE作ったんで、入ってくださいーい！」

卒業式の日、半ば強制的に加入させられたものの、一ノ瀬佑に関する情報が次々にアップされるLINEの通知音を聞いていると、それが良かったことなのかわからなくなった。報告をする母親たちはみな、車の中という安全な場所から見ただけだから私は大丈夫(、、、、)とアピールしていた。まるで、檻の中の囚人を監視する看守のようだった。

次々とアップされるLINEには、ときに一ノ瀬佑を写した画像や動画が貼られたものもあった。そこまでの母親たちに嫌悪を覚える一方で、スマートフォンに映る一ノ瀬佑の姿に、私は祈りのようなものを感じてもいた。一ノ瀬佑に伝えたら「そんな大げさな」と笑われそうだが、夕暮れの薄闇を歩く一ノ瀬佑の姿に、本能で暗闇を求め泳いだ少年の頃の一ノ瀬佑が重なるのだった。

一ノ瀬佑と再び会ったのは、緊急事態宣言が解除され、中学校の分散登校が始まった五月中旬のことだった。

その日、私は午前中に下校した梢と悠真を連れてN市を訪れた。一ノ瀬佑は一ヶ月ほど前と変わったところはなくて、まったく一ノ瀬佑のままだった。私はなぜかそれをととても安堵した。

その日、私たちは一ノ瀬佑の家には行かず、私がかつて3Dの一員として一年間を過ごした予備校の前で二十分ほど立ち話をして別れた。三つの雑学を披露し終えた一ノ瀬佑は、梢と悠真に向かい、

「ここはキミたちのお母さんやお父さんが通った塾なんだ。特に悠真くん、キミのお父さんとお母さんは、ここで出会ったんだよ。キミにとってここは特別な場所になるだろうね。ボクに

とつても、ここは特別なんだ」

と言って、手を振り去っていった。12と書かれた緑色の背中がどんどん小さくなっていき、やがて物陰に消えた。

一ノ瀬佑が死んだのは、それから四日後のことだった。

資源物のゴミ当番に現れない一ノ瀬佑の異変に、近所の住人が数人で一ノ瀬佑の自宅を訪れてインターホンを押したが、反応がない。近所の住人は、一ノ瀬佑が寝坊するなんて珍しいこともあるものだと楽観していたが、昼過ぎになっても散歩に出る様子のない一ノ瀬佑を不審に思い、警察に届けたのだという。

一ノ瀬佑の死を私に伝えたのはヤッチだった。ヤッチは、一ノ瀬佑が亡くなった日の夜の医師の集まりで、その死を知った。ひとりの医師がなにかを可笑しそうに話しているので近づくと、それは一ノ瀬佑のことだった。

「ああ、君も知ってると思うけど、あの(、)緑の男が死んだよ」

一ノ瀬佑の検死をした医者は、ヤッチに気づくとそう言って白い歯をにっこり見せた。それは、3D時代の三人組のひとりで、一ノ瀬佑に近づかないほうが良いと私たちに忠告した男だった。あいつは佑さんの死を冒瀆していた、とヤッチは言った。具体的な内容は語らなかつたが、受話器の向こうのヤッチの悔しそうな声に、すべてを察した。

「信じられるか？ あんな奴が生きてて佑さんみたいな人が亡くなるなんて、なに考えてるんだよ？」

誰に向かって言っているのか、きつと自分でもわからないのだと思う。ヤッチは憤っていた。受話器越しにも泣いているのがわかった。一ノ瀬佑の死因は、不明のまま処理された。急性心不全。

一ノ瀬佑の死亡診断書にはそう記された。

ヤッチとの電話を切ってまず考えたのは、梢にはどのタイミングでどう伝えれば良いのか、ということだった。明日と明後日は土、日曜だから学校はないが、月曜日に学校で耳にする可能性はないか。そのとき受ける衝撃に、梢は耐えられるのか。おそらく、無理だろう。

このとき、どういうわけか私は冷静だった。一ノ瀬佑がこの世にいないということが実感できていなかったのか、それとも親としての本能が私の精神を鈍化させていたのか。詳しいところはわからないが、梢と、それから悠真のことだけを考えていた。

梢はもう寝ていたが、念のため外に出てヨッチに電話をかけた。二人で相談し、明日の土曜日に、それぞれ伝えることに決めた。心のフォローは、ヤッチがしてくれることになった。

翌朝、梢は遅くまで寝ていた。十一時になっても起きてこない梢のもとへ行き、梢を起こし

グループLINEがひっきりなしに鳴っていた。機械に疎い私はそのとき、ミュート機能というものを知らなかった。そして、止(よ)せばよいのに、書き込まれる情報にすべて目を通した。医師であった両親を海外での事故で亡くしその遺産で生活していたこと。かつて結婚していた梢と同一年の息子がいること。息子が生まれるタイミングで家を建てたこと。息子が幼稚園に上がる年に妻が突然息子を連れて家を出たこと。過去のことまではわからないが、ここ近年歩き続けていたのは偶然を装って息子と会うためであったこと。まだ四十九歳だったこと。コロナじゃないよね？ 持病があったらしいよ？ 自殺だったって聞いたよ？ 実は殺されたとか？

一ノ瀬佑は死んでもなお、心を持たない言葉の暴力にさらされていた。

彼女たちにとって、一ノ瀬佑とは一体なんだったのだろうか？ 彼女たちはどうしてそこまで一ノ瀬佑に執着するのだろうか？ 一ノ瀬佑がどのように死んでいったのかなど知って何になるというのだろうか？ 原因や理由など、死を前にしたら些細なことではないのか？ 重要なのは、一ノ瀬佑はもうこの世にいない(、、、、、、)という事実なのではないのか？

言いたいことはたくさんあった。でも、もうどうでもよかった。私は、グループLINEから抜けた。

梢が学校を早退しなくなり落ち着きを取り戻した頃、突然、喪失感に襲われた。ああ、私が一ノ瀬佑に会うことはもうないんだ。そう思ったら、涙が溢れてきた。一度流れ出した涙は、なかなか止まらなかった。梢がいないときのほとんどを、私は泣いて過ごした。いくら泣いても、涙は止むことをしなかった。

——ほら、5リットル流れちゃうよ？

聞こえるはずのない一ノ瀬佑の声が聞こえたような気がした。暑い日が続いたせいもあってか、食欲が落ち、水も飲めなくなった。ほとんど食わず、コーヒーしか飲まない日が続いた。ある朝起きると、頭がぼーっとし、手足がやけにしびれていた。無性にイライラして梢に当たり散らした。自分が自分でないようだった。ヤッチにメールをすると、すぐに内科へ行つて、と返信がきた。

脱水だった。点滴を受け、経口補水液を買って家に帰ったが、やはり食べたり飲んだりする気持ちになれなかった。一ノ瀬佑のことを考えても、涙は出なかった。もう、5リットル流れちゃったのかな。そんなことをぼんやりとする頭で考えた。私にとって、世界は三歳の頃の押入れのようだった。ひとつ違うのは、そこに一筋の光もないことだった。

梅雨明けした初夏の日曜日。

私たち、梢と悠真とヤッチとヨッチと私は、A高原にいた。梢と悠真がどうしても五人でA高原へ行きたいとお願ひしてきたのだった。

「ねえ、五人であの高原に行きたいんだ」

「ヤッチとヨッチは、できれば楽器を持ってきてほしいな」

ヤッチとヨッチは渋ることなく時間を作ってくれた。日曜日の午後二時にB市を出発して、ヨッチのファミリーカーでA高原へ着いたときは午後四時を回っていた。

梢と悠真は、ヤッチとヨッチに一年前の一ノ瀬佑とのキャンプの様子を話しながら高原を案内した。バンガローや調理場やキャンプ場や森や沼地など。私たちは、しばらく二人の案内で高原を歩いた。

太陽が山の向こうに沈もうとしていた。

キャンプ場の端っこで円になって、一ノ瀬佑との思い出話を聞かせてくれていた梢と悠真が、そろそろだねといった感じでアイコンタクトを取り、シンクロするようにゆっくりと立ち上がった。

「じゃあ、今から歌うね」

「佑、ちゃんと聞いててよ？」

そう言う二人は、去年の夏、一ノ瀬佑の伴奏で歌った曲の旋律に乗せてアカペラで歌い出した。

緑の高原に ギコギコ鳴り響く

いくらかすれども ぼくらは飛べず

段ボールのなか ふわふわ雲のよう

電気パンを焼いて みんなでわけた

たった二年の記憶が

ぼくらの胸をあたためる

佑の知恵がぼくらを導いた

佑よ佑 ぼくらの光

太陽の色は かつて青かったけれど

表面の温度が下がり オレンジ色になった

やがて赤色に変わって

最後には消滅するのです

ぼくらのいのちもいつか燃え尽きる

それでも残る 誰かの記憶に

佑の声が耳元で聞こえる

今でも一緒だ ぼくらは仲間だ

佑の声が耳元で聞こえる

今も生きてる ぼくらのなかで

持ってきたギターをケースから取り出したヤツチが、一番の途中から伴奏を始め、ヨツチが一番と二番との間奏からブルースハープを吹き出した。梢の声は去年と変わらず澄んでいて、悠真の声は変声期を迎えたのか少しかすれていた。二人の瞳からは涙がすつと流れていた。最初は、二人の、悲しみや寂しさや一ノ瀬佑に会いたい気持ちや悔しさなど、言葉にならない様々な感情が溢れ出したものだと思ったが、そうではないようだった。涙は自然と頬を伝い落ちていくようだった。二人の声はまったく震えていなかった。二人の声は真っ直ぐに高原の中を響きわたった。空で一番星が輝いていた。

翌日、私は早朝の街を歩いた。ふと思いついてそのまま家を出たから、化粧も日焼け止めもせずに、Tシャツにジーパンという格好だった。ぼさぼさの頭を隠すためにキャップを被り、習慣でマスクもつけた。薄闇に包まれていた街が次第に白く変わっていく。普段とはまったく別の街がそこにはあった。ここは一ノ瀬佑の歩いたN市ではなかったが、日の出前の白い街を歩いていると、一ノ瀬佑のことが自然と思いついた。ただ、悲しみは訪れず、私は一ノ瀬佑との日々を思い出しながら、黙々と歩いた。きっかり一時間歩いて、家へ戻った。

次の日も、同じ時間に家を出た。その時間に街を歩く人は、私以外にいないようだった。三日目、私はマスクを外して歩いた。夏の朝の匂いがした。小学生の頃、ラジオ体操をしながら嗅いだ匂いだった。久しぶりに空気の匂いを嗅いだ気がした。ひんやりとした空気を胸にいっぱい吸い込むと、身体のひとつひとつの細胞が目覚ましていくのを感じた。街は静かで、穏やかで、清らかだった。そこは、コロナの存在しない時間が流れていた。

私は、毎朝歩いた。その日の気分でコースを変えて歩いた。街を進み、川辺を歩き、坂を登り、丘を渡った。歩き続けた一ノ瀬佑の気持ちを知ることにはなかったが、歩くということは心地の良いことだと知った。

ある朝、梢の卒業した小学校のあたりを歩いていると、六年生のときの同級生の母親と遭遇した。その母親の子が男の子だったこともあり、あまり接点がなく、在校中に会話を交わしたことはほとんどなかった。

母親は、きちんとしたウォーキングシューズを履いて、ランニングでもしそうな格好で向こ

うから歩いてきた。母親は私に気付くと、直角に曲げて前後に大きく振っていた肘を伸ばし、軽く手を振った。

「こずちゃんママ、おはよう。久しぶり」

母親は、私のもとへやってきて声をかけると、「こんな偶然ってあるんだね。こずちゃんママにずっと会いたかったんだ」と言った。

それから、私の瞳をじっとみつめると、うん、とひとつ頷いて話し始めた。

「こずちゃんもこずちゃんママも、きつと傷ついていると思う。事実だけでも苦しいのに、いろんな人が好き勝手なこと言って、ホントに辛いと思う。グループLINEから抜けたのも、そのせいだよな？ 気にするなって言っても気になっちゃうかもだけど、でも、やっぱり気にしちゃダメ。こずちゃんママは賢いからわかっているとちゃうけど、大きな声の意見がみんなの意見ってわけじゃないんだよ。声の大きな人たちは目立つから、それがみんなの声みたいって聞こえちゃうけど、小さな声にも耳を傾けてみて。それから、声にならない声にも。グループLINEで助けることができなくてごめんね。けど、私は、ワープマンのこと、変な人だとは思わなかったし、ワープマンと交流できたこずちゃんとこずちゃんママは、かけがいのない時間を過ごせたんだろうなって、ちょっと羨ましく思ってる。なんか、このタイミングでこんなこと言うって嘘っぽく聞こえちゃうかもだけど、でも、これからも私はこずちゃんとこずちゃんママの味方でいたいと思ってるよ。声、ちっちゃくて頼りないかもだけど。気が向いたら、いつでも連絡してね」

気付くと、私は泣いていた。脱水で涙が止まってから、初めての涙だった。ああ、生きていたいな、と思った。たとえば、人の悲しみを癒せる人間になれなくても、ただ、生きていたい、そう思った。

「泣いたりして、ごめんなさい」

「気にしないよ。いっぱい泣いたらいいと思う」

山の合間から朝日が顔を出してきた。

「そろそろ帰って子供を送り出さないとね。今日も暑い日になるらしいから、水分と塩分補給、しっかりね。じゃあね」

そう言うと、母親は颯爽と去っていった。

*

一ノ瀬佑を想うとき、三歳の頃に押入れから見た風景を思い出す。臉の裏に映る父や母、それに抱かれる弟たちの姿はやがて、街を歩き酒を飲み語り合う一ノ瀬佑の姿へと変わっていく。一ノ瀬佑は、私にとっての光だったのだと思う。爛々と輝くまばゆい光ではなく、濃紺の

空にゆらゆらと瞬く星のような白くほのかな光だ。

一ノ瀬佑の死がもたらしたのは、闇だ。闇は、これからもその深さを増していくのかもしれない。だが一方で、私はあの日、一ノ瀬佑が語ったことを思い出す。闇の先に光が待っているかもしれないじゃないか、と。

たとえば闇を求めて泳ぐような。

一ノ瀬佑について語ることに先にあるのが光なのか深い闇なのか、私にはわからない。それでも、私はこれからも一ノ瀬佑について語り続けるだろうと思う。梢や悠真やヤツチやヨツチたちと、一ノ瀬佑の話をするのだろうと思う。一ノ瀬佑にその声が届くのかはわからない。届くはずがないことも知っている。けれど、もし声が届くならば、一ノ瀬佑に私たちの記憶のなかを歩いてほしい。闇とか光とか気にすることなく、自由に歩いてほしい。そう、願う。

了